

大学図書館問題研究会誌 第34号 2011年 8月 抜刷

大学図書館問題研究会

がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態
-筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例-

The Ecology of Gama-jumper and Tulip-san
-The Case of Use in University of Tsukuba Library-

嶋 田 晋

がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態
—筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例—

The Ecology of Gama-jumper and Tulip-san
-The Case of Use in University of Tsukuba Library-

嶋 田 晋*

抄 録

2011年2月6日(土)に奈良県中小企業会館にて開催された大学図書館問題研究会近畿4支部新春合同例会での嶋田晋氏による講演「がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態—筑波大学附属図書館でのキャラクター活用事例—」の報告である。

目 次

1. がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんって誰？
2. どうして生まれたの？
3. 生みの苦しみ？
4. BCとADの違いは？
5. 評判やいかに？
6. 課題と展望

ご紹介いただきました、筑波大学附属図書館の嶋田と申します。皆様の前でお話する機会をいただき、本当にうれしく思っております。また、平城遷都1,300年という節目の年に奈良に来ることができましたが、このような機会がなければなかなか関西方面には来ることないので、非常にありがたく思っております。がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの生態ということで、筑波大学附属図書館で生まれたキャラクターについてお話しします。何かの参考にしていいただければと思います。よろしく願いいたします。

前半は、主にキャラクターが生まれた経緯ですとか、内幕について取り上げます。以前、『大学の図書館』に原稿を書かせていただいたのですが、その内容をブラッシュアップした形でお話できればと思っています。後半は、キャラクターの実際の活用例を写真等々で紹介します。本日使ったス

ライドは、WebにPDFで掲載してありますので(<http://hdl.handle.net/2241/105066>)、この場合でも、お帰りになったあとでも、ご確認くださいければと思います。

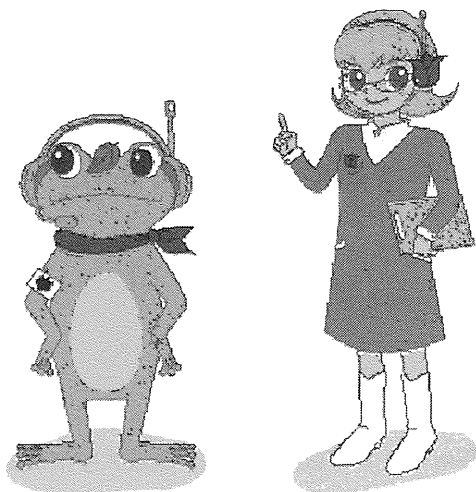
本日の話の内容ですが、まず、がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんの誕生の経緯、作成において苦労したことについてお話しします。BCとAD、紀元前と紀元後ではないのですが、誕生の前と後で変わったことについてもお話ししたいと思います。また、「評判はどうなんですか」と聞かれることがあるので、評判についても触れます。最後に活用事例を、時間の許す限りご説明したいと思います。

○1. がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんって誰？○

がまじゃんぱーとちゅーりっぷさんは何なのかということから始めます。ご存知の方も多いと思うのですが、筑波大学附属図書館のキャラクターということになっています。

がまじゃんぱーは、ガマがジャンプするものです。筑波大学附属図書館から20キロほど北に筑波山があるのですが、昔から筑波山ではガマの油というものが取れるといわれており、がまじゃんぱー

*しまだ すずむ 筑波大学附属図書館 2011年7月20日受理



がまじゃんぱー

ちゅーりっぴさん

は、この有名なガマの油を生み出す四六のガマから由来しているキャラクターです。

ちゅーりっぴさんというのは、筑波大学附属図書館の愛称が昔からTulipsという名前と呼ばれていたことに由来しています。Tulipsは、Tsukuba University Library Information Processing Systemという情報処理システムだったのですが、今はTsukuba University Information Public Serviceのようにサービス全般を示しています。

振り返ってみますと、意外と時間が経っているのですが、がまじゃんぱーとちゅーりっぴさんは、公式には2006年4月に誕生しており、もうすぐ丸4年になります。主に、附属図書館の広報に使っています、というか、それ以外にあまり使う用途がないのです。何でこのように人気者になったのかというと、ご存知の方も多いかと思うのですが、あるブログに取り上げられたことがきっかけとなったという経緯があります。

Webで公開されていますが、がまじゃんぱーとちゅーりっぴさんの公式プロフィールは、このようになっています。グーグルで探してみると、上から1番目が2番目に出てくると思います。筑波大学附属図書館のページから、このプロフィールのページに行き着けた人はいますでしょうか。実は、あるところに隠しリンクが張っており、マウスを

動かしてみるとポインターが変わるところがありますので、時間のある人は探してみてください。

このように細かいプロフィールの設定はいろいろあるのですが、要は、がまじゃんぱーはカエルです。ちゅーりっぴさんは人間の女性形ということになっていて、出身がりぼじとり星で、一応、司書資格はもっているという設定になっています。

○2. どうして生まれたの？○

キャラクター作りが実際に動き出したのは2005年の後半になってからですが、当時、先行している事例がいくつかありました。国立情報学研究所のCATやILLのページに登場していたネコとヒヨコのプワンちゃんとピヨ太郎の事例とか、北海道大学のリポジトリ、HUSCAPでちょこちょこ登場していた小さな緑色の鳥のはすかっぴちゃんというのもありまして、「キャラクターがほしい」ということが職員の間で話されていました。もう1点、図書館職員が、広報に対して、苦手意識というか、うまくできないという自覚をもっていて、何かアピール力があるものが必要であることを共通で意識していました。そして、ちょうどキャラクターを作り始めようとしていたときに、今から4年前ですが、電子図書館システムの更新の時期となり、ホームページとから情報の玄関口、ポータルへというコンセプトの変換を図ろうとしており、当然、システムとかWebページという図書館の顔で変わる部分もあるので、キャラクター作りという新しいことを始めるきっかけとなりました。あと、電子図書館システムで大きく変わる部分について利用者様に説明をするために広報も重要であり、広報のために何かインパクトがあるものがほしいとのことで、キャラクターを作るという話は、当時、常々、出ていたわけです。そのとき偶然だったのですが、キャラクターの作成を含めて広報関連に使うお金がつかまりましたので、とくに誰かが声をかけたのではないのですが、キャラクターや広報に興味がある職員が何となく寄り

集まって話しているうちにキャラクター作りの具体的な動きになっていきました。

○3. 生みの苦しみ?○

2005年度の後半なのですが、このようにしてキャラクター作りの有志の一同の活動が開始されました。最初にキャラクターの目的を決めました。まず、「このように使いたい」というイメージを固めることにしました。「Webでこのように使いたい」とか、「Q&Aでキャラクターが出てくるとよいのではないか」、「グッズも作りたい」といった活用のイメージを固め、その上でキャラクターのコンセプトを作っていました。

この段階で、「Q&Aで掛け合いで使えるように、2人一組のキャラクターのほうがよい」ということでまとめ、2人一組について「人間同士がよいのか」、「動物同士がよいのか」、「それ以外がよいのか」と、ブレインストーミングした結果、ガマモチーフ男性形とチューリップモチーフ女性形の2人一組で、ガマはカエルの子、チューリップは人間っぽい感じ、というコンセプトが固まりました。コンセプトが固まった段階で、有志のなかに絵心のある人がいたので、デザイン原案を作ってくれました。

今日ここにおられる皆さんは、実はとても幸運なんです。公式の場でお見せするのは初めてなのですが、これが、がまじゃんぱーの初期のラフ画です。当初のコンセプトとして、ガマなのにスキー板がないとジャンプできないという設定が考えられ、スキージャンパーのイメージになっていました。下に描かれているのは、ちゅーりっぷさんとの大きさの対比ですが、現在のものより小さい感じになっています。ガマガエルの大きさに近づけようとしたのです。現在のものと比べるとだいぶ違ってはいるのですが、どこから見てもカエルだよなという感じのラフ画を作ってくれています。一方、ちゅーりっぷさんのほうですが、よりファンタジーっぽいというか、妖精っぽい感じとするために、当初は、服が完全に逆さまのチューリップ

をイメージしていました。配色もチューリップらしい感じです。現在のほうがおとなしい感じになっているのですが、チューリップ型のヘッドセットは最初の案から引き継がれており、業者がうまくまとめてくれたと思います。

このような感じでわりと楽しく作られてはいたのですが、やはり一番苦労したのが上層部への説明でした。ただキャラクターを作りたいというのではなく、広報戦略の一環として位置づけることとし、ブランディング戦略として広報のためにキャラクターが必要だということを説明したプレゼンテーションを作成して、アピール力の向上、広報力の向上を目的としたキャラクターの作成の必要性を訴えました。幸い、上層部の方々は理解してくださり、30分ぐらい話して「キャラクター作成はどうですか」と尋ねたところ、「いいんじゃない」と一言でいわれたので拍子抜けしたのですが、GOサインが出たのが2005年末でした。

さきほどのラフ画をベースに業者さんに発注して、サンプルをいくつか作ってもらったのですが、現行のキャラクターはすごく最初のラフ画に近いイメージです。これ以外にも2種類ぐらいサンプルが出てきたのですが、それぞれイメージが異なっていました。館内でそのサンプルを出して投票をしたところ、今のキャラクターの原案が圧倒的な人気で当選しました。利用者様とか先生方に投票してもらったわけではなく、身内だけの投票でしたが、館内で了承を得たということで、今の原案に近いものを使うことになりました。

再度、上層部に確認をとったところ、何点か指摘を受けました。大きな指摘として、「ちゅーりっぷさんはどこかで見たことがある気がするのだが、権利的に大丈夫なのか」ということと、「ガマだけでよいのではないか」ということです。確かに、造形の人物は、探せばあちこちにいるような気はしますし、ちゅーりっぷさんはわりとアニメっぽい部分があるので、不安に思われたのだと考えられます。もう1点、ちゅーりっぷさんですが、当時は、ちゅーりっぷちゃんということで、幼くみ

えるような造形になっていたのですが、幼くみえることが指摘されました。ちゅーりっぷさんに問題点があるということで、ガマだけでよいのではないかとの指摘が出たのですが、当初からQ&Aでの掛け合いで使うというコンセプトがあるので、「単独だとキャラクターとして使いにくく、2人組のほうがよいのです」と説明し、ちゅーりっぷさんを認めてもらうために、眼鏡を追加したり、若干の造形を変えて個性化したり、ちゅーりっぷちゃんから、ちゅーりっぷさんというふう呼び方を変え、図書館のお姉さんという感じにイメージを修正しました。館長、副館長、部長からの指摘について1点1点解決しつつ、細部を調整して何とか無事に完成をみたという感じであります。

実際に作ってみてどうだったかという話ですが、キャラクターのコンセプトを考えるときには、本当に放課後の部活のノリと勢いのように、「ああだ、こうだ」と皆でいいながら作っていき、楽しかったです。辛かったのは、上層部への説明とか、最後のGOサインを得る時の壁です。辛いというより、手間がかかったという面がありました。ただ、当初から一貫して、「図書館としての広報力をつけたい」、「大学内外に向けてアピールしていきたい」、「今まで筑波大学の図書館なかった何かを打ち出したい」ということを一貫して主張していったのがよかったと感じています。

「どうしてもキャラクターというものを作らなくてはならない」ということを上層部に納得してもらうことができたことが、勝因というか、キャラクター作りが認められた理由であると思っています。あと、キャラクター作りのためのお金があったこと、上層部の理解を得られたこと、キャラクターを作りたいという有志がいたこと、有志の中には絵の描ける人、アイデアを出す人など、各方面バランスよく、また暴走する人もフェードアウトする人もなく、皆が集まって、一緒にキャラクターを作ることができたという意味で、本当に運がよかったと思っています。もう1度ゼロから作れといわれたら、作る自信がないというのが正

直なところですよ。

脱線しますが、「キャラクターの名前はどのように決めたの」とよく聞かれます。お恥ずかしい話なのですが、これ結構いい加減なんです。最初、コンセプトを考えた時点で、名前は仮称として決めてはいたんですが、ちゅーりっぷさん、ちゅーりっぷちゃんは筑波大学附属図書館の愛称Tulipsからとって、ちゅーりっぷさんでよいのではないかということが初めから決まっていた。がまじゃんぱーですが、確かにガマベース、カエルベースというのはコンセプトの時点で固まっていたのですが、名前を決める段階の際、当時、システム更新の時期だったのですが、システム仕様作成委員の先生方が深夜にメールのやりとりをしていたときに、「システムの名称とか愛称っていうのは重要なんだろうか」という話が持ち上がった中で、「名前がそんなに重要じゃないんだったら、がまじゃんぱーとかヘルダイバーとか、そんな名前でもいいんじゃない」というメールがあったのですが、キャラクター作成の有志は、皆、そのメールを読んでおり、「あっ、それいいんじゃない」ということで採用されたのです。

がまじゃんぱーという名前は、インパクトがあり、ガマがジャンプしていろいろなものを取ってくるイメージでもあったのですが、そのがまじゃんぱーという名前から、最初のラフ図ではスキージャンパーのような格好が考えられてきて、わりと名前から逆に造形が決まっていたこともありまして。

今にして思うと、やっぱり名前は重要だったと思っています。名前はインパクトあったほうがいいし、当然、親しみやすさもあったほうがいいです。作った側としては、図書館のキャラクターではあるのですが、図書館以外の人にも、がまじゃんぱー、ちゅーりっぷさんと呼んでほしいという思いがありました。筑波大学の場合、Tulipsという名前は、学生、教員の間にそれなりに浸透しており、問い合わせとかカウンターで対応するときでも、「Tulipsで探してみたら」のように、OPACで

探すことをTulipsで探すというように、Tulipsという名前はそれなりに浸透はしていたので、ちゅーりっぷという言葉は使ってよいのではないかと判断しました。ガマのほうも、筑波と聞いたら反射的にガマと出てしまう傾向があるので、ガマに困んだ名前だったら受け入れられやすいのではないかなということになりました。

○4. BCとADの違いは？○

ビフォアキャラクターとアフタードレーニングですが、キャラクターが実際に作られる前とキャラクター登場後ということですが、職員の意識に変化がありました。これは本当に見ていて感じますし、周りからも、図書館職員全体からも、「やはり変化があったね」といわれます。というのは、キャラクターを作ってみると、皆、掲示とか配布物にどんどん使ってくれるんです。こちらから使ってくださいといわなくても、データを置いておくと、「これ使っていいんですか」と聞かれるので、「いいですよ」というと、皆、どんどん使ってくれるので、図書館のお知らせとか掲示物が、昔ながらの事務文書っぽいものではなくて、見て楽しいように作るような意識の変換が起こったと思います。キャラクターのよいところは、ちょっと空いた部分に入れることができ、ワードでクリップアートを入れるのと同じ感覚でキャラクターを一つ入れるだけで印象が変わってくるので、効果がある気がします。そこから職員全体として、利用者様に読んでもらうもの、利用者様にアピールするものとは何かというような意識が高まっていったという印象があります。

○5. 評判やいかに？○

一方、職員のほうはともかく、利用者様からの評判はどうだったでしょうか。実は、システム更新が重なっていたので、キャラクターを作った後は、サービスサイドもシステムサイドも、皆、シ

ステムにかかりきりになり、積極的なアピールができませんでした。そのため、サービスサイドで掲示物に少し使ってもらったりして、徐々に浸透させていったというか、そうせざるを得ませんでした。最初は、本当にひっそりとしたデビューであり、キャラクターを作ったのはよいけど、本当に見てもらえるのか、最初は不安でした。

何がきっかけでブレイクすることになったのかといいますと、人気が出てきたきっかけとして、筑波大学にある図書館情報メディア研究科（図書館情報大学の研究科）と図書館の研究開発室（この研究開発室の先生方は図書館情報大学の先生が中心ですが）が図書館情報メディアリテラシー教本の試作版を共同で作成したのですが、この教本の試作版を見た学生さんが、そこに掲載されていたキャラクターをブログに取り上げたことが挙げられます。

教本自体はあんまり出回ってはいないのですが、中身を見るとキャラクターの掛け合いがあります。ただし、こちらから提供したのは画像と若干のプロフィールだけだったので、教本を作る現場で勝手にキャラクターのプロフィールの設定を変更することもあったのですが、結果としてはよかったということはありません。

あと、若干余裕が出てきたところで、グッズを作りました。当時、機関リポジトリのプロモーションをしていましたので、機関リポジトリに注力する形で、リポジトリのプロモーションとして、キャラクターのグッズを作ったというわけです。それ以外に、オープンキャンパスのときには、図書館に来館した高校生の方々へのお土産として図書館の説明を書いたうちわを作ったのですが、カウンターで高校生にうちわを配っていたら、「かわいい」との歓声があちこちで上がっていたので、キャラクターが受けたのだと思います。余ったうちわをカウンターで配布したところ、あっという間になくなってしまいました。先生方も学生もかわいいと思ってくれるようですし、学外の図書館関係者のブログで紹介されたこともありました。ただ、

がまじゃんぱーに限るようです。ちゅーりっぴさんのグッズをあまり作っていないせいもあるのですが、がまじゃんぱーのほうが人気があるようです。あとこれ以外に、教員に対しては、機関リポジトリのプロモーションのときとか、図書を寄贈していただいたときに、付箋とかクリアファイルをお渡ししているのですが、すごく喜んでお礼の電話までかけてきてくれた方もいらっちゃって、キャラクターを作った側としては非常うれしく、作った甲斐があったと感じています。学生さんに限った話ですが、オリエンテーションで上映する図書館のプロモーションビデオにがまじゃんぱーもこっそり登場しているのですが、そのシーンは留学生も含めてうけています。グッズを見ると学生さんも「かわいい」と喜ぶのですが、これもがまじゃんぱーのグッズに限られる傾向があります。残念ながら、ちゅーりっぴさんの評判は不明なんです。ある図書館関係者から、会うたびに、「ちゅーりっぴさんを立体化をしてほしい」といわれるので、「立体化する技術をもっている人がいたら紹介してください」と答えています。

○6. 課題と展望○

現状の課題ですが、最初、立ち姿と最低限の喜怒哀楽の表情の顔を作ってもらっただけなので、動きとか表情にバリエーションが少ないことを解決しなければなりません。あと、リテラシー教本で使用されたときに顕著だったのですが、キャラクターの設定が若干混乱している状況です。正式に決まっている設定はごくわずかしかなかった。また、キャラクターをどのように使えばよいかというガイドラインも整備されていません。そのため、皆、少し、好き勝手に使っているという状況です。このほか、ワンパターンな使われ方しかされていないということも最近感じています。また、ちゅーりっぴさんの影が薄いので、ちゅーりっぴさんもフィーチャーしていきたいなとも思っています。

今後の展望ですが、まず、キャラクターの設定のバリエーションを増やしていきたいと希望しています。できれば細かい設定まで固めていきたい部分もありますが、細かすぎてもつまらないので、加減が難しいと感じています。あとキャラクターの使い方のガイドラインの作成についてですが、今にして思えば、使い方のガイドラインを決めていなかったのが、皆、好きに使ってくれたため、使い方に広がりが出てきたという部分があるので、ガイドラインをガチガチに決めるのも問題があるのではないかと感じています。ほかに、認知度も向上させなければなりません。具体的には、大学の公認キャラクターとして、大学当局の公認を得たいと思っています。大学の公式グッズを売っているショップがありますので、そこで、キャラクター入りのグッズを販売してもらうのが希望です。あと、海外展開ということで、機関リポジトリ関連で国際会議に出席する動きがありますので、ポスターなり、発表なりで少しずつ露出していき、「筑波大学という、あのカエルとチューリップだよ」と海外でもいわれるようなキャラクターに育てていくことも望んでいます。

最後に考察ですが、がまじゃんぱー、ちゅーりっぴさんがここまで知られるようになったのは、幸いなことに、図書館の外に熱心でしかも影響力の強いサポーターがいたことが影響して、人気が出てきたためであると思います。職員も自主的に、かつ積極的に使ってくれたのですが、これもキャラクターが広がった理由です。グッズについても、幸い、予算がついたときにそれなりの量を作り、配ることができましたが、これもキャラクターが広まった理由かと思います。これらの結果として、学内外に、地味ではありますが、キャラクターが浸透していきました。

そのため、当初、意図してはいませんが、垂直水平といえるかはわかりませんが、リテラシー教本とか図書館のプロモーションビデオのような堅めなものから、掲示のように職員の裁量でワンポイント利用するものに使うという垂直展開、ま

た、筑波大学の図書館の中だけではなく学外へと露出していくような水平展開がなされたのだと思います。

あと、これは賛否がありますが、個人的には、がまじゃんぱーやちゅーりっぷさんは、ゆるキャラではないと思っています。わりと線もはっきりしており、インパクトも強いことから、キャラクターとしての個性が際立っているのを受け入れられたのではないかと思います。あと、がまじゃんぱーのほうが人気がある理由としては、日本のキャラクター市場として、やはり非人間キャラのほうが扱いやすいというような風潮があるのではないのでしょうか。

話が少し散漫になってしまいましたが、筑波大学の図書館キャラクターの作成から、実際に作ったときの話から、現状までざっとお話しましたので、残りの時間は実際の活用事例を何点か紹介いたします。

まず、リテラシー教本の紹介になります。ご覧になった方いらっしゃるかもしれませんが、ページをめくりますと、このように、ちゅーりっぷさん、がまじゃんぱーの紹介があったりして、文中でもこんなふうに顔のイラストと一緒に、それぞれの掛け合いとして話が進んでいきます。よく読んでみると、「何でこんな文章を考えるんだ」という部分もありますが、掛け合いで話が進んでいきます。掛け合いが随所に出てきて、かつ職員の勉強になる内容がしっかり組み込まれている教本になっていますが、キャラクターのおかげで、楽しく読めるようになっていると思います。

次に、館内での活用例ですが、よく見るとあちこちにいますという感じで、デイトスリップ、開館カレンダー、返却の注意事項、バイト募集のチラシ、パネルに出ていたり、最近登場したブラックがまじゃんぱーは、盗難への注意喚起に使われています。

最近、機関リポジトリ関連でポスターを作る機会が多いのですが、その際もキャラクターを出すことにしています。

先ほどうちの紹介をしましたように、オープンキャンパスや企画展でも使っています。

特別展の展示では、入場者数を数えるために、キャラクターの等身大のパネルを2つの入口において、入場者にカウンターを押してもらっています。

Webにも登場してまして、バナーのところにも顔が出ていたりとかしています。

広報という意味では、こういうブログベースの広報内にキャラクターを登場させています。あと、学生向けの利用案内という感じで、週5図書館生活というキャッチフレーズで作っているブログにも登場しています。この、『週5図書館生活、どうですか？ザ・ムービー』というのが、さっき紹介したプロモーションビデオですが、アンケートのときにもコメントを掛け合いでやったりしています。

あと、こっそりとブログを立ち上げたのですが、ここにもがまじゃんぱーの顔を使っています。特別展の講演の内容をYouTubeでこっそり配信してまして、そのときにもアイコンというか、顔画像にもキャラクターの顔を使っています。先程説明した図書館のプロモーションビデオにも、ところどころ思い出したように、がまじゃんぱーが登場しています。ビデオのワーキンググループの人が一生懸命がんばって、着物を着たり、刀をさしていたり、違うバリエーションのがまじゃんぱーを作ってくれました。あと、ノートパソコンの裏にがまじゃんぱーが貼り付いていたり、フォトフレームの中にがまじゃんぱーがいたり、よく見るとあちこちにいるという細かな演出がなされています。クレジットにも、ガマの妖精役として、がまじゃんぱーが記載されています。

各種グッズに関しては、博士論文の電子化データの提供のプロモーション用のCD-Rを配っているのですが、このCD-Rのジャケットと盤面に、ちゅーりっぷさんがメインのバージョンから、劇画タッチ風のバージョンなど、キャラクターがいろんなバージョンで描かれています。あと、タンブラーも実はあるんです。PDFで、リポジトリのサイト

からダウンロードできるので、自分で切って入れてみると、あっという間にがまじゃんぱータンブラーに変身できます。

これは付箋とか、クリアファイルですね。あと、これがうちわになります。ということで最後は駆け足になってしまいましたが、今日使ったスライドは、ウェブ (<http://hdl.handle.net/2241/105066>) 掲載してありますので、興味がある方はご覧になってください。ちょっとサイズが大きくなってしまって、このファイルだけでたぶん3メガぐらいあると思うので、ダウンロードされる際には気をつけてください。

最後のほうは、散漫になってしまいましたが、筑波大学ではこのような感じでがまじゃんぱー、ちゅーりっぷさんを作って活用していますということで、何かのご参考になれば、ここまで来てお話しした甲斐があります。

どうもありがとうございました。